

2023年3月5日、梅窓院・祖師堂で「りんりんふえすV.O.I.10」という路上生活者が生活を立て直すための生業となる雑誌『ビッグイシュー』を応援する音楽イベントが催された。シンガーソングライターの寺尾紗穂さんを発起人として、筆者が理事を務めるホームレス支援ボランティア団体ひとさじの会、ならびに貧困支援に関わる諸団体（ビッグイシュー日本、ビッグイシュー基金、つくり東京ファンド、山友会）が協力して毎年イベントを続けてきた。私は実行委員会の一員としてHPの作成やチケット管理など裏方の支え役を担当した。りんりんふえすの名称は「隣の人と輪になるう」という「隣」「輪」の音をかけたもので、老若男女300人以上の来場者が音楽を聴き、座談会で学び、炊き出しやコーヒーを味わう、にぎやかな催しに成長していった。子連れ歓迎のイベントのため、幼児が会場を走り回り、時には乳児を連れた親子が参加してくれたこともある。今回、初開催時に寄稿した拙文を久しぶりに読み返してみた。

終盤、寺尾さんによる「このイベントをあと10年は続けたいです。続けてこそ意味があるのでだから」との宣言が飛び出しました。

そもそも10年続いたなら……。今日来場してくれたあの子たちは、どんなに大きくなっているのでしょうか。大人になるにつれ、きっと今はまだ知らない差別や偏見の心と、否が応にも向き合わなければならない日がやってくることでしょう。そんなとき、一緒に音楽を楽しみ、悩み考えようというこんなイ

## 工藤量導

もしも一人が笑えるのなら みにくい嘘や偏見なんて  
砂の城のように崩してしまえ 遥かな海へ

（寺尾紗穂「魔法みたいに」より）

りんりんふえすのステージの様子  
(Photo: 横関一浩)



ゆ  
か  
風

微

風

吹

動

## 微風吹動

イベントがあつたことを思い出して、また一緒に語ったことができたなら、「こんなに嬉しいことはありません。ともに生きよう。Sing with your neighbours!（全国青少年教化協議会『ぴっぴら』2011年11・12月号）」

この時の10年継続宣言がみごとに有言実行された（コロナ禍による3年間の延期を挟む）。同時に、あの時参加した子どもたちが今や中高生になっているかと思えば何とも感慨深い。私自身もこの間に結婚し、子どももが生まれた。

「ピンクは絶対に嫌。青い色の方がいい！」もうすぐ6歳になる息子が公園でレンタルの自転車を借りた際の一幕だ。10年前ならスルッと通り過ぎたに違いない何気ない言葉。いざ親の立場になると少しザラツとした質感で、そこに必要以上の含意を読み取ろうとしてしまう。「これが好き」という選択は、大概の場合、「それよりも好きではない何か」の集合体によつて支えられている。色の好みひとつをとつても、そこには社会の中で育ち、学んできた何らかの蓄積がある。それが岩盤のように堅い固定観念なのか、それとも砂団子のように脆い一時的な固まりなのか、いつか砂の城が築かれててしまうのか、それはまだ分からない。

ともあれ、何を好み、何を好みないかは、他人が勝手にコントロールできるものではない。もちろん親であつても。とすれば、せめて息子に願うのは、自分の好きな色だけでなく、誰かが好きな色も同じように大切にしてほしいということだ。その延長上に「誰もが好きな色を選ぶことのできる社会」があるはずだから。

終演後のアンケート欄には「小さくてやさしい平等な居場所」「久し振りに平和な空間に来た」「こんなにも受け容れられて祝福されるイベントは初めて」「人は自分の居場所があると安心で、人の輪で人は生かされる」「歌も演奏も本当に祈りでした。身体が、全身の細胞が燃えてます」と書かれていた。逆に言えば、社会の中にそれだけ無条件に肯定される安心の居場所が少なくて、求められているにもかかわらず得がたいということだろう。もしも嘘や偏見がない世界を叶える方法が「魔法」や「祈り」しかないのだとすれば、案外それはファンタジーというよりも、リアリスティックな現実社会との向き合い方なのかもしれない。

冒頭に示した寺尾紗穂さんの楽曲「魔法みたいに」は次の一節で結ばれる。

もしも二人が笑えるのなら 美しい時を語えるのなら

欺く言葉に立ち向かえるよ 魔法みたいに

ともに笑い、謳い合える、カラフルな場の美しさが次へ踏み出す凛々の勇気をくれる。先のアンケートには「明日から現実に向かえます」「感謝と学びは行動で次につなげていきます」「私のできることから、私の隣の人と」との言葉が多く並んだ。ひとまず区切りとなつたりんりんふえす。たどりながらそめの催しだつたとしても、大事なのは誰かの心と細胞に篤い灯をともしたことだ。慈しみの温もりが一人からまた隣の一人へ伝わり橢円の輪のように広がつてゆくこと、尽きることのない灯から灯への分火こそ「魔法」であり「祈り」であると信じたい。

くどう りょうどう 1980年青森県今別町生まれ。青森教区本覚寺副住職。博士（仏教学）。大正大学仏教学部仏教学科専任講師、浄土宗総合研究所研究員。専門は中国浄土教、著書に『迦才『浄土論』と中国浄土教—凡夫化土往生説の思想形成』（法藏館、2013年）など。